

奥出雲仁多米特別栽培米「奥出雲千石米 コシヒカリ」スマート栽培指針

月	4月					5月					6月					7月					8月					9月																			
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25															
生育段階・区分	育苗					活着					有効分けつ					無効分けつ					幼穂形成					穂ばらみ					登					熟									
播種	田植え										有効分けつ決定期					穂首分化期					最高分けつ期					穎花分化期					減数分裂期					出穂期					成熟期				
水管理																																													
技術内容	<p>◎健康な苗づくりを！</p> <p>堆肥施用 深耕 稲わら腐熟</p> <p>できるだけ外気温にならして健苗育成 硬化期は温度管理に注意しながら 薄まきの励行(乾期1000〜1200g/箱)</p>					<p>◎基肥は控えめに！</p> <p>有機物多用田では減肥</p>					<p>◎植え付けは適正に！</p> <p>・一株付け本数 三〜四本</p> <p>・体系処理による効果的除草 ・いもち・虫予防に箱施薬</p>					<p>◎水管理の徹底</p> <p>・中干し(一株約二十二本になった時) ・作溝の実施</p> <p>◎水管理の徹底</p> <p>・水位・水温センサーの活用により水管理の省力化を図る。</p>					<p>◎穂肥は適期に適量を！</p> <p>有機質肥料のため</p> <p>・出穂前二五日・幼穂長約〇・五mm</p>					<p>◎仕上げは完全に！</p> <p>・カメムシ防除</p> <p>・登熟期後半は中断灌水</p>					<p>◎稲わら腐熟促進</p> <p>・網目一・九〇使用 水分四・〇〜一五・〇％ 適正な乾燥へ急激な乾燥は避けゆくりと 青味粗率一〇〜一五％ 適期刈り取り 完全落水は出穂の30日後</p>					<p>◎葉色・莖数をみて生育に応じた施用を！</p>									

◆栽培での注意事項

栽培目標	多収を第一とせず、粒張りの良い玄米生産を心掛け、安定した「仁多米」ブランドの維持を図るため、今後必要のある減農薬、減化学肥料栽培によるコメ作りを行い、環境負荷の低減並びに省力化を図る。
土づくり	粗大有機物は完熟堆肥を1.0t程度施用する。(但し、集積状況、土壌診断結果に基づいて決定する。深耕は18cmを目安とする。)品質低下を防ぐため土づくり資材の使用。
施肥	肥料は極力有機質肥料を使用。施肥量は化学肥料窒素成分量で10a当り2.75kg以下とする。(コシヒカリ)水田モニタリング機器データ等を活用し、肥料投入量を調整する。
育苗・田植	薄播き(乾粒100〜120g)健苗育成に努め、1株3〜4本植とする。
水管理	水管理を通じて生育調節、根の健全化、地力窒素の活用等の効果を高める。水田センサーによる適正な水管理を行うとともに見回りの省力化を図る。
病害虫防除	調和のとれた土づくり、健苗育成等の耕種改善による健康な稲体作りを基本とし、防除は畦畔の草刈り等耕種防除をまず実施する。農薬を使用する場合は、防除剤、種子消毒剤を含めJAしまね雲南地区本部が指定した薬剤を使用する。なお、指定農薬以外の薬剤防除が必要な状況が生じた場合は、関係者が協議し、その結果基準値を上回る追加防除を行なった圃場の米は慣行栽培扱いとする。防除については、AIカメラによる病害虫発生予察やドローン等を活用し、化学農薬の使用量を低減及び省力化を図る。

◆施設設計(10a当り)

粒状肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥	成分量(kg)			
				窒素	燐酸	加里	苦土
生わら	全量						
堆肥	(※)1000						
田んぼの守	60			1.8	1.8	2.58	
優作	30			3.0 [1.47]	3.0	3.0	
※ホスピタ (下記摘要参照)		20		1.0		2.3	
けい加里 プレミア34		(※)20			4.0	0.8	
優作			20	2.0 [0.98]	2.0	2.0	
合計				5.0 [2.45]	7.8	10.8	5.68

(※)堆肥の施肥量は、土づくりの集積状況や土壌診断に基づいて決定する。

(※)窒素肥料の施肥量は、土壌診断及び稲の生育状況により散布量を減らす。

(※)ホスピタは、初期成育の差数を確保するため基肥で施用するか、根張りを良くするため中間追肥で施用する。

(※)けい酸加里プレミア34を中干し前(田植後30日〜35日)に施用する。

(注)「AIカメラ」「衛星写真」「収量コンバイン」等で蓄積したデータを活用し、肥料の投入量を調整し化学肥料の投入量低減を図る。

ペースト肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥	成分量(kg)			
				窒素	燐酸	加里	苦土
生わら	全量						
堆肥	(※)1000						
田んぼの守	60			1.8	1.8	###	
フレーバーペースト734	40			2.80 [1.40]	1.2	1.6	
※ホスピタ (下記摘要参照)		20		1.0		2.3	
けい酸加里 プレミア34		(※)20			4.0	0.8	
優作			20	2.0 [0.98]	2.0	2.0	
合計				4.80 [2.38]	6.0	9.4	5.68

◆農薬使用基準(成分回数8回以内)

注1)〇内の数字は成分回数を表します。

注2)農薬使用基準を正しく守りましょう。

種子消毒剤	特別栽培米の種籾は、無消毒種子を用い、温湯種子消毒を行なう	
育苗箱施薬	稲名人箱粒剤②	
除草剤	体系	初中期 ビクトリーZジャンボ②又は ビクトリーZ1キロ粒剤②又は ビクトリーZ400FG②
	中後期	アトリー1キロ粒剤①又は アトリー豆つぶ①
本田防除	【出穂前】 (いもち病・紋枯病・カメムシ類) アミスタートレボンSE② トレボン粉剤DL① } どちらか1回選択	
	【出穂後】 (カメムシ・ウンカ類) スタークル液剤10①又は、スタークル粉剤DL①	

(注)ドローンの活用により防除作業の省力化に努める。

AIカメラを活用して適期防除に努める。